

書かない 小論文指導

第2回

【意見と理由】

AO・推薦指導で実績を残してきた“カンザキメソッド”開発者、神崎史彦氏による連載。

第2回目は、小論文に必要な「根拠」「意見」「提案」の三要素のうち、「意見」をもつための授業と、その授業設計の背景にある理論の一つ「デザイン思考」を紹介します。

「意見と理由」を考える授業を紹介するため、まずは、私の基本的な授業モデルをご紹介します。

- ① アイスブレイク・チェックイン (10〜15分)
- ② 発散・収束のワーク (1つのワークで20〜40分)
- (1) 問いの提示
- (2) 発散
- (3) 収束
- ③ 授業全体のリフレクション・チェックアウト (10〜15分)
- ④ ホームワーク(小論文執筆)

右記のように、私の講義の特徴は、「②発散・収束のワーク」を毎回実施している点です。「発散」「収束」は後述する「デザイン思考」やPBL(Project Based Learning)、小論文執筆において大切です。

発散と収束が 意見と理由の基となる

発散とは、問いに対するさまざまな選択肢をつくることを指します。そもそも小論文の設問に対する主張の方向性は数多くありますから、主張を思いつく限り想定して吐き出し、より良い「意見」「理由」を導くための選択肢を準備します。

一方、収束とは、発散によって生まれた

選択肢の中から、目的に沿って選択することです。それが目的の実現に向けて有効かということ、優先順位をつけたり、時には統合したりしながら、数を絞り込みます。

つまり、「発散」「収束」の手続きを経たうえで、その過程を基に根拠を論理的に整理したものが「理由」であり、それを基にした設問に対する回答が「意見」になります。

なお、私は設問に向き合い思考する場面と、その内容を文章として整える手続きを分けることを推奨しています。答案作成時によくありがちなのが、思いつくままに原稿用紙のマス目を埋めていこうとするケースです。そうすると発散が不十分のままに主張の方向性を定めることになったり、そもそも発散と収束の過程を踏まずに感想を述べるだけで終わったりします。設問に対する意見や理由を考えるにあたり、多様な選択肢を検討したり、意見や理由の妥当性を検討することなく答案を作成するのは危険です。ですから、思考を発散・収束するワークと、「意見」「理由」を構築するワークは分けて実施しています。

「駆動質問」によって 探究サイクルを促す

発散・収束を促すため、ワークの冒頭で「駆動質問(driving question)」を生徒に投げかけます。生徒が探究サイクルを回して解決方法を探る支援をするため

に、教師が示す問いのことです。つまり「問い(駆動質問)の提示→発散→収束」の連の手続きを「②発散・収束のワーク」と呼んでいます。

使えるコマ数によって、前述の授業モデルを基に、講座全体をデザインします。②は制限時間によってワークの数を決めます。なお、1つのワークにつきおおよそ20〜40分は時間を要します。ですから、例えば1コマ50分であれば1つできればよい、というくらいの余裕をもたせます。120分あれば、ワークは3〜4つ程度行えます。

デザイン思考の定着が ワークのねらい

「②発散・収束のワーク」では、学習者に「デザイン思考」を身に付けてもらうことを目的としています。デザイン思考とは、デザイナーがデザインをする過程で行う思考のことで、実践的・創造的な問題解決を行う手法です。IDEOのデビット・ネリーがビジネスへ応用したこと

で有名になりました。デザイン思考は二つの問題を解決することではなく、問題に関わる現在と未来の条件を考慮し、複数の解決方法を探求していきます。私はこれを応用し、小論文を書くうえで大切な「考える」というプロセスのなかで、「発散」「収束」というデザイン思考の基本になる手続きを踏んでいます。大学入試では、この発散と収束の手続きを受験会場で再現でき



神崎史彦

1978年生まれ。1996年に法政大学に法学部論文特別入試で合格。在学中より塾講師を務め、卒業後は大学受験予備校などで小論文の講義を担当する一方、模擬試験の問題作成者として活動し、20冊の学習参考書を出版。現在は自らの塾を経営しながら、講演や私立学校での講師を務め、全国各地の高校教育改革ならびに高大接続事業のコンサルティングを行っている。2020年4月よりスタディサプリ講師に就任。社会人大学院生(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)。21世紀型教育機構アクレディテーションメンバー。

なければならず、その定着のために繰り返しワークを実施しています。

また、私はPBLで授業を行っています。PBLとは、現実社会に存在する問題に取り組み学びのスタイルで、創始者はJ・デューイと言われています。

PBLでは仮説と検証を繰り返し、試行錯誤の過程を学びます。すなわち「問い—調査・実験・試作—とりあえずの解の発見—新たな問いの発見…」という探究のサイクルを基に、目的達成をするということなのです。これは「②発散・収束のワーク」にある「問い(駆動質問)の提示—発散—収束」の一連の流れと重なります。

「主張」「根拠」のワーク

最後に、実際の講義の例を示します。120分で行う場合、下記のように(1)問いの提示(2)発散(3)収束を繰り返す設計をすることが多いです。

例えば、初回の授業は自己紹介を兼

● 学習指導例(講座初回、対象：高2：120分)

「もしあなたがペアの相手にキャッチフレーズをつけるなら、どのようなものにするか」

本時のねらい ①発散・収束の方法を習得する ②小論文の要素である「意見」「理由」を導く練習をする

学習活動	指導上の工夫・駆動質問・留意事項	教材・教具
アイスブレイク (15分)	ペアの組成、先攻・後攻の決定 個人ワーク「あなたにとっての『素敵な日曜日』を、身近なものを使って、作品として表現しよう」 ペアワーク「つくった作品を基に、あなたにとっての『素敵な日曜日』をペアの相手に語ろう」	
ワーク① ペアの相手の特徴を探る (20分)	問いの提示 「面識の薄いペアの相手のキャッチフレーズをつけるためにヒアリングを行おう」 発散(ペアワーク)「ペアの相手に、特徴や趣味や好きなことを聞いてみよう」※付箋1枚につき、特徴や趣味を一つ示す。 収束(個人ワーク)「メモ書きの中のキーワードの中で『その言葉を読いたらこの人だ』とわかりそうなキーワードに○を5つつけてみよう」「その○をつけたキーワードに順位をつけてみよう」	ノート・メモ用紙※1
ワーク② キャッチフレーズをつくるコツをつかむ (20分)	問いの提示 「キーワードを基にキャッチフレーズをつくるわけだけど、前例があるとイメージが付きやすそうだね。そのエッセンスを含めたキャッチフレーズをつくらう」 発散(グループワーク)「アイドルのキャッチフレーズを見つめると、面白い傾向が見えるかも。いくつか出してみよう」※付箋1枚につき、傾向を一つ示す。 収束(グループワーク)「アイドルのキャッチフレーズに潜むネーミングのポイントを抽出してみよう」「例えば『地域名』『本人が好きなもの』『数』『本人の特徴』『比喩』など、いろいろありそうだね」	黄色の付箋(75mm×75mm)※1
休憩(10分)		
ワーク③ キャッチフレーズを決める【設問に対する意見を決定する】 (20分)	問いの提示 「ネーミングのポイントを基に、ペアの相手のキャッチフレーズを考えよう」 発散(個人ワーク)「思いつくキャッチフレーズを書き出してみよう」【発散のときには「これはないだろう」というものでも書き出そう】※付箋1枚につき、キャッチフレーズを一つ示す。 収束(個人ワーク)「相手の特徴を最も表しているキャッチフレーズを1つ選ばう」	ピンク色の付箋(75mm×75mm)※1
ワーク④ キャッチフレーズを決めた理由を説明する【意見に対する理由を述べる】 (20分)	問いの提示 「今までの過程を踏まえて、なぜ選んだキャッチフレーズが相手の特徴を示すものとして優れているかを説明してみよう」 発散(ペアワーク)「そのキャッチフレーズにはどういうネーミングのポイントがあるのか、それは相手のどういう特徴や趣味と紐づくの、理由を示してみよう」※付箋1枚につき、理由を一つ示す。 収束(個人ワーク)「今挙げた理由に優先順位をつけてみよう」	水色の付箋(75mm×75mm)※1
リフレクション・チェックアウト (15分)	学びの共有 「授業を受ける前と比べてどのように成長したか、みんなでシェアしよう」 感情の共有 「メンバー同士の気持ちを整えるために、授業を通しての自分の状態や気持ちを語り、みんなでシェアしよう」	
小論文の課題【ホームワーク】	「もしあなたがペアの相手にキャッチフレーズをつけるなら、どのようなものにするか」(400字以内)※2	『小論文のルールブック(KADOKAWA)』の論説※2

写真提供：鹿児島純心女子高校(鹿児島・私立)

ねて、「ペアの相手のキャッチフレーズを考えたよう」というワークをします。小論文で用いる「意見」「理由」を発散・収束によって導く経験をしてもらうことが主な目的です。

なお、新型コロナウイルス対策のため、オンラインで授業するケースが増えてきました。また、課題提出や自主勉強会(輪読等)の報告もGoogle ClassroomやZoomを用いています。私もZoomを用いています。ブレイクアウトセッションでペアワークを行ったり、Google Jamboardで付箋を用いた発散・収束のワークを実施したりしています(左図中※1部分)。

また、課題提出や自主勉強会(輪読等)の報告もGoogle ClassroomやZoomを用いています。私もZoomを用いています。ブレイクアウトセッションでペアワークを行ったり、Google Jamboardで付箋を用いた発散・収束のワークを実施したりしています(左図中※2部分)。

今回は私の通常の授業設計と、「意見」「理由」をグループで考えるワークについて紹介しました。次回は「提案」まで含めた授業について、ブルームのタキノミリーなどを含めてご紹介しようと思います。